



sousei akita

曹 青 秋 田

2010.3 第67号 秋田県曹洞宗青年会

*平成21年度 『住職学研修』報告

講師には秋田市消防本部より四名の救急救命士の方々三浦氏、千葉氏、京野氏、石川氏にお越し頂き、「救急救命講習」として心肺蘇生法とAEDについて講義していただきました。



救急救命士をお招きしての研修の様

去る平成二十二年二月二十五日、秋田県宗務所を会場に、「住職学研修」が開催されました。

はじめにスライドを使って救急医療の現状と通報から救急車到着までの応急手当の必要性を講義頂いたあと、実際に人形を使って応急処置の仕方、心肺蘇生法とAEDの使い方方を四つの班に分かれて分散研修を行いました。(研修部長 佐藤晃心記)
第二教区 東傳寺 鈴木智之
私のお寺ではAEDを設置しています。皆様も経験あると思いますが、東傳寺ではお寺でお葬式の最中突然倒れられた方がいました。お勤めを一時中断し、救急車を呼び対応した事がありました。その時の経験と、以前からの住職の発願から「お寺での救急時、お寺の側での救急時に備え東傳寺にAEDを設置しよう」となり現在に至っています。
今回の住職学研修は、AEDを実際に使用しての救急救命講習となりました。秋田市消防署から救急救命士さんを招いての講習で秋田市内では近年、約一万軒の119番通報があり、それを八台の救急車に対応しているとの事。また救急車が

られる人はどのくらいいるのでしょうか？
「アレホステル。プラメディック。バイタルサイン。」初めて耳にする用語でした。しかし若い人や意識の高い人には既に常識となっている言葉です。

今回の研修会では消防隊員から実際に心肺蘇生の方法を学び、質問にも丁寧に答え頂け非常に満足を感じました。そして同時に「この満足」に自分の今までの意識の低さを感じました。
今後の人生で今回学んだ「救命救急」が役立つ場面に遭うかどうか、もし遭った時にももしかしたら一つの命を救う事が出来るかもしれない。こんなにも素晴らしい知識と技術とは中々無いのではないのでしょうか。
決して難しい専門的な事ばかりではありませんので、私も含めて「の新しい常識」が、一日も早く只の「常識」になればと願います。



曹青会員による班別に分かれての応急処置・AEDの研修模様



sousei akita

曹 青 秋 田

発行所:秋田県曹洞宗青年会
事務局 010-1102 秋田市太平目長崎字本町58 源正寺内
発行責任者:明石浩延 編集責任者:工藤範隆(お問い合わせ先 015-0011 由利本荘市石脇字石脇108-5 石龍寺内)
秋曹青ホームページ <http://www.sousei-akita.net/>

到着するまでの数分間、一般の方の迅速な対応が非常に大切である事を改めて確認しました。

そして実際に救急現場を想定し、出席者全員による訓練をしました。人の生死を分けるかも知れないという思いからか、真剣な訓練となりました。

私たちはそれぞれが「生きてこそ」「日々お勤めさせて頂いております。この度の任職学研修は人は「生きてこそ」「何でもできる何にもなれる」といつたり前の事を確認できた時間でありました。



スライドを使って分かり易く説明される



人形を使っでの応急処置の仕方を学ぶ

救命救急講習会に参加して

第十教区 福厳寺 栗谷大三

以前、テレビで救急の特集を見た時に人の命を救うために懸命な救急隊員の姿と、その一刻も命を争う緊迫した場面に圧倒されたことがあります。もし自分がその場にいたら、何ができるのか。その時強く思ったのを覚えています。

去る二月二十五日、任職学研修に於いて救急救命の講習会がありました。秋田

市消防本部から四名の救急隊員の方にきていただき、説明を受けました。

始めに、秋田市における救急出動の状況、心肺停止患者の蘇生率、応急手当の重要性などの説明を受け、その後、実技講習へと移行しました。

秋田市では平成二十年度約一百万件の救急出動の内、二八一件は心肺停止状態の人で、またその内の二五〇件は、救急車が到着するまでに周りの方によって応急手当を受けていたそうです。この応急手当を受けていた人の割合は全国的に見ても高く、その結果、その後自分の足で退院される人の数も多いのだそうです。

人間は、心臓が止まってから6分間何もしないと約9割は死んでしまうそうです。時間が過ぎるにつれて蘇生の機会も失われていき、生存率はどんどん下がっていきます。しかし、秋田市で通報から救急車が到着するまでの平均時間は6分30秒、つまり救急車が到着するまでの応急手当が非常に大事となっているのです。

では命を救うためには何をしたらいいの

か。まずは119番、そして応急手当です。文字にすると簡単ですが、実際にその場面に遭遇した時に冷静にかつ迅速に対応できるかというところはやはり訓練や講習を受けていなければ無理だと思えます。心肺蘇生に関しては一分一秒も無駄にはできません。もしもの時にどのような手順方法で対応すればよいのか、今回それを確認できただけでも、大変意義があったと思います。

また、実技講習では、AED(自動体外式除細動器)の説明も受けました。平成十六年から一般の人も使えるようになったことから、街中で目にする機会も増えていきます。県内のお寺でも設置している所があります。メーカーによって種類あるそうですが、基本的な操作は同じで簡単に使えるようになっていっています。お寺は人が多く集まる場所であり、様々な場面を想定しなければなりません。檀家さんの命を守ることも任職の大事な責務だとするとして、AEDの設置は必然であるし、講習を受けるのも当然なのではないかと思えます。

最後にになりましたが、緊急の場合において最も大切なのは患者を助けたい熱意と勇気だということです。人口呼吸や心臓マッサージは教わる事ができるし、訓練もできませんが、勇気は教わることはできません。助けたいと思う熱意や気持ち、踏み出す勇気へとつながるのだと思います。そしてそれがあればこそ、今回の講習会で学んだことが生かせるのではないかと思えます。



救急救命士による心肺蘇生法の実演

新しい常識。任職学研修。

第一教区 蒼龍寺 佐藤聖明

今年は雪も少なく過ごしやすくなり、冬となりました。この度の研修も一月とは思えない穏やかな日差しの中、宗務所禅センターをお借りして有意義に行われました。

お寺には不特定多数の方が出入りし、特に御年配の方が多いと感じるのは、私のお寺に限った事ではないと思えます。日々そのような状況で過ごす私たち僧侶は、仏事に精通すること以外にも、身に付けていなければならぬ事が多くあります。当然「救急救命」もその中の一つと言えます。

現在、救急救命は自動車免許取得の際の条件であったり、義務教育の課外授業で行われたり、若年層には親しみの多い云々ば常識となつて来ており、ノルウェーでは義務教育の課程ですし、アメリカで救急救命士といえばヒーロー的な職業として市民の憧れとされています。

私は現在三十代半ばですが、はたしてこの年代の人間で救急救命を「常識」と感じ